



NPO インターンシップ調査報告書 別添（データ版）

2023 年 3 月

一般財団法人 日本民間公益活動連携機構
NPO 法人アクションポート横浜

1、学生アンケート

回答者は 338 人、有効回答率は 100%であった。

本アンケートでは NPO は、NPO 法人（特定非営利活動法人）に限らず、法人格を持たない市民活動団体や、株式会社、一般社団法人等の法人格で非営利の活動やソーシャルビジネスを行っている団体等、幅広い組織と定義する。

1 NPO に関する基礎的情報

(1) NPO についてどの程度の知識を持っているか（単一回答）

対象者：全員

NPO についてどの程度知っているかという質問に対して、「NPO についてある程度知っている」（250 人、74%）の回答が最多で、「NPO についてはほとんど知らない」（68 人、20.1%）、「NPO についてよく知っている」（20 人、5.9%）が続く。

Q1	あなたは NPO についてどの程度知識がありますか？	人数	%
1	NPO についてよく知っている	20	5.9
2	NPO についてある程度知っている	250	74.0
3	NPO についてはほとんど知らない	68	20.1
	無回答	0	0.0
	合計	338	100.0

(2) NPO の活動に興味や関心があるか（単一回答）

対象者：全員

「NPO の活動に多少は関心がある」（208 人、61.5%）が最多で、「NPO の活動にとっても関心がある」（71 人、21%）、「NPO の活動に特に関心がない」（59 人、17.5%）に続く。

Q2	あなたは NPO の活動に興味や関心がありますか？	人数	%
1	NPO の活動にとっても関心がある	71	21.0
2	NPO の活動に多少は関心がある	208	61.5
3	NPO の活動には特に関心がない	59	17.5
	無回答	0	0.0
	合計	338	100.0

(3) NPO の活動に関心を持ったきっかけ（複数回答）

対象者：NPO の活動に「とても関心がある」または、「多少は関心がある」と回答した学生

NPO の活動に関心を持った動機として、「高校や大学の授業・ゼミを通じて」（221 人、79.2%）の回答が最多で、「NPO の活動をニュースや新聞等で見聞きして」（84 人、30.1%）、「NPO の活動にボランティアとして参加して」（43 人、15.4%）が続く。

Q3	NPO の活動に関心をもったきっかけを教えてください。	人数	%
1	高校や大学の授業・ゼミの学習を通じて	221	79.2
2	NPO の活動をニュースや新聞等で見聞きして	84	30.1

3	NPO の主催するイベントに参加して	36	12.9
4	NPO でのインターンシップに参加して	32	11.5
5	NPO の活動にボランティアとして参加して	43	15.4
6	その他	5	1.8
	無回答	1	0.4
	回答者数	279	100.0
	Q2 で 3 と回答	59	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・団体を作ったため
- ・途上国に住んでいたため、身近にそういう活動がたくさんあったので
- ・NPO 職員に直接話を伺う機会があり、そこから興味を持った
- ・講義で NPO の活動に参加した
- ・NPO 法人でバイトをした
- ・中学生の時に NPO 法人の塾に通っていたから。

2 これまでの NPO でのインターンシップ経験

(1) インターンシップの参加経験（単数回答）

対象者：全員

インターンシップに参加したことの無い学生は、全体の 8 割を超えていた。

Q4	NPO でのインターンシップに参加したことがありますか（または現在参加していますか）	人数	%
1	はい	57	16.9
2	いいえ	281	83.1
	無回答	0	0.0
	合計	338	100.0

(2) NPO インターンシッププログラムのテーマ（単一回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターン実習先の主なテーマは、「まちづくり」（18 人、31.6%）が最多で、「子どもの健全育成」（15 人、26.3%）、「国際協力」（7 人、12.3%）が続く。

Q5-1	インターンシッププログラム実習先の主なテーマ	人数	%
1	福祉	6	10.5
2	社会教育	4	7.0
3	まちづくり	18	31.6
4	災害救援	0	0.0
5	国際協力	7	12.3
6	子どもの健全育成	15	26.3
7	環境保全	2	3.5
8	その他	5	8.8
	回答者数	57	100.0
	Q4 で 2 と回答	281	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・ネットワーク NGO
- ・市議会議員
- ・政治
- ・コンサルタント

(3) インターンシップ実施期間（単数回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターンシップ期間は、「1か月以上半年未満」（16人、28.1%）が最多で「半年以上」（14人、24.6%）、「5-10日間」（12人、21.1%）が続く。

Q5-2	インターンシッププログラム実習期間 SA	人数	%
1	5日未満	11	19.3
2	5～10日間	12	21.1
3	11日以上1か月未満	4	7.0
4	1か月以上半年未満	16	28.1
5	半年以上	14	24.6
6	その他	0	0.0
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

(4) インターンシップ活動開始時期（単一回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターンシップを開始した時期は、「大学3年生」（25人、43.9%）が最多で、「大学2年生」（21人、36.8%）、「大学1年生」（8人、14.0%）が続く。

Q5-3	インターンシッププログラム実習実施時期（活動開始時期）	人数	%
1	高校時代	0	0.0
2	大学1年	8	14.0
3	大学2年	21	36.8
4	大学3年	25	43.9
5	大学4年	3	5.3
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

(5) インターンシップ参加動機（複数回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターンシップへの参加動機は、「参加したNPOの活動テーマに関心があるから」（25人、43.9%）が最多で、「いままでやったことのない経験をしたいから」（24人、42.1%）、「NPOに関心があるから」（23人、40.4%）が続く。

Q5-4	NPOでのインターンシップに参加した理由	人数	%
1	NPOに関心があるから	23	40.4
2	ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスに関心があるから	10	17.5
3	参加したNPOの活動テーマに関心があるから	25	43.9
4	人の役に立ちたい、社会に貢献したいから	20	35.1
5	サークルや自分が行っているボランティア活動等に活かしたいから	5	8.8
6	自分の実力が社会で通用するか試してみたいから	10	17.5
7	自分に自信の持てる体験がしたいから	9	15.8
8	働くことがどういうものなのか体験したいから	9	15.8
9	いままでやったことのない経験をしたいから	24	42.1
10	専門知識やスキルを獲得できそうだから	7	12.3
11	大学生活を有意義に過ごしたいから	15	26.3
12	就職活動に役立ちそうだから	17	29.8
13	大学の授業の一環だから	14	24.6
14	先生や先輩、友人の勧め	4	7.0
15	その他	1	1.8
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・団体を立ち上げたから

(6) インターンシップに参加した感想（複数回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターンシップへ参加した感想は、「参加したNPOの活動分野に興味を持った」（34人、59.6%）が最多で、「NPOに関心が高まった」（29人、50.9%）、「NPOの活動にもっと参加してみようと思った」（16人、28.1%）が続く。

Q5-5	NPOでのインターンシップの感想	人数	%
1	NPOに関心が高まった	29	50.9
2	参加したNPOの活動分野に興味を持った	34	59.6
3	NPOの活動にもっと参加してみようと思った	16	28.1
4	NPOへの就職を考えるようになった	7	12.3
5	NPOへの関心が薄まった	4	7.0
6	参加したNPOの活動分野への関心が薄まった	1	1.8
7	NPOの活動への参加意欲が薄れた	1	1.8
8	NPOへの就職を考えていたが見直そうと感じた	2	3.5
9	特に変化はなかった	7	12.3
10	その他	2	3.5
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・主体的に関わっていたため、自分の参加枠組みがインターンであると感じたことはなかった。
- ・福祉への関心が高まった。

(7) 参加したインターンシップの満足度（単一回答）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

インターンシップの満足度は、「満足」と「どちらかといえば満足」を合わせて51人（89.4%）であり、「どちらかといえば不満」「不満」と感じている学生は、1人（1.8%）であった。

Q5-6	NPOでのインターンシップの満足度	人数	%
1	満足	32	56.1
2	どちらかといえば満足	19	33.3
3	どちらともいえない	4	7.0
4	どちらかといえば不満	1	1.8
5	不満	0	0.0
6	無回答	1	1.8
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

(8) 満足度の理由（自由記述）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生
参加したインターンシップに「満足」と回答した学生

インターンシップ参加への、満足度の理由は以下の通りである。

- ・企画に関して、学生団体での経験を活かしつつ、学校外の機関と連携しながら活動を行うことが出来たから。
- ・興味があったNPOの組織運営の仕方や具体的に何をして、どんな思いで活動を行っているのかインターン活動を通して学ぶことができたから
- ・インターンに参加しなければ行かない様々な活動に参加するきっかけになった。
- ・かなり成長できたと思う。コロナ禍で何もできない大学生活だと思ったけれど、有意義な時間を過ごせた。
- ・大半満足しているが、なかなか思うように活動できないという側面もある。
- ・さまざまな大人と関わる機会が持てたから。
- ・コロナ禍突入期で、本来する予定だった活動はできなかったが代替プログラムは良い経験となったから。
- ・自分が暮らしている地域の課題を知ることができた
- ・子供たちと触れ合えて良かったから。
- ・npo法人という運営形態だけでなく、その魅力についても知ることができたから
- ・多様な立場の方とのコミュニケーションを知ることができ、まちづくりに深く関われたことも今後の糧になった。
- ・漠然としていた活動内容が見えて、自分に合うところ、合わないところが発見できた。
- ・色々な方と接する環境に身を置くことができ、大学2年生までで出来なかった他者との意見交換・交流が出来たからです。
- ・より多くの気づきを得られたら良かったと思ったため
- ・楽しかったのと将来を考えられるようになったから
- ・作業のような活動であったから。
- ・普段の生活では聞くことの出来ないお話など沢山聞いたから。

- ・最後までやり切れたから
- ・大学の授業では経験できない現場での体験をすることができ、自分自身障がい者の方への配慮など視野が広がったと思うから。
- ・多様な社会福祉課題についての他者の貴重な意見や思想に触れることができ、自身に眠る固定観念や偏見を見直そうと思えたから。
- ・普段体験できない経験をすることができたから。
- ・普段は体験できないことを行うことができたから
- ・活動を通してさまざまな知見を得ることができた。
- ・学びが多かった。
- ・柔軟な働き方とやりがいを感じるができるため
- ・これと言った理由はないけど、すごく満足したわけでもないし満足してないわけでもないから
- ・自ら事業を計画し、事業の立ち上げ、補助金獲得全てを行い、今後もそれを生業として生きていこうと決心できたため。
- ・参加費がかかり、高額だった
- ・誰かの喜びに貢献できたと感じたから
- ・受け入れ先の方とうまくコミュニケーションが取れなかったから
- ・いろんな分野の景色が見れたから。
- ・他の大学生とも協力して活動ができたため
- ・活動計画や引き上げの速さに少し疑問を持ったが自分自身に自信がついたのが何より良かったことだと感じた
- ・学校ではできない経験をさせていただいたからです。
- ・就職のための良い経験ができたから。
- ・社会で働く大切さを知ったため
- ・普段は体験できないことを多く体験できたため。
- ・活動内容だけでなく、社会人として必要なことなども学ぶ機会があったから

(9) 参加したインターンシップの形態 (単一回答)

対象者：インターンシップに参加したことがある(現在参加している)と回答した学生

インターンシップの形態は、「大学の授業」(28人、49.1%)が最多で、「NPOや企業等民間団体が主催するプログラム」(23人、40.4%)、「自分で実習先を探して実施」(3人、5.3%)が続く。

Q5-8	NPOでのインターンシップの形態	人数	%
1	大学の授業	28	49.1
2	NPOや企業等民間団体が主催するプログラム	23	40.4
3	自治体(県や市区町村)の主催するプログラム	0	0.0
4	自分で実習先を探して実施	3	5.3
5	その他	3	5.3
	回答者数	57	100.0
	Q4で2と回答	281	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・知人に誘われて
- ・コンサルタント
- ・先生からの誘い

(10) 参加したインターンシップのプログラム名または、主催団体（自由記述）

対象者：インターンシップに参加したことがある（現在参加している）と回答した学生
「NPO や企業等民間団体が主催するプログラム」に参加したと回答した学生

インターンシップのプログラム名または、主催団体名は、以下の通りである。

- ・アクションポート横浜 16名
- ・NPO 法人ドットジェイピー 3名
- ・NPO 法人教育支援協会南関東
- ・NPO 法人国際自然大学校
- ・チャリティーサンタ

3 これまでのNPOでのボランティア経験

(1) ボランティアの参加経験（単一回答）

対象者：全員

NPOでのボランティアに参加したことがある学生は91人(26.9%)であった。

Q6	NPOでのボランティアに参加したことがありますか（または現在参加していますか）	人数	%
1	はい	91	27
2	いいえ	245	72.5
	未回答者	2	0.6
	回答者数	338	100

(2) ボランティア活動の主なテーマ（単一回答）

対象者：ボランティア活動に参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

ボランティア先の主なテーマは、「まちづくり」（21人、6.2%）が最多で、「環境保全」（18人、5.3%）、「子どもの健全育成」（15人、4.4%）が続く。

Q7-1	ボランティア実習先の主なテーマ	人数	%
1	福祉	14	15.2
2	社会教育	7	7.6
3	まちづくり	21	22.8
4	災害救援	3	3.3
5	国際協力	8	8.7
6	子どもの健全育成	15	16.3
7	環境保全	18	19.6
8	その他	6	6.5
9	無回答	0	0.0
	回答者数	91	100.0
	Q6で2と回答または、未回答	247	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・ 中間支援
- ・ 若者の自殺
- ・ 防災
- ・ 遺骨収集
- ・ ゴミ拾い

・子ども食堂

(3) ボランティア活動期間（単数回答）

対象者：ボランティア活動に参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

ボランティアの活動期間は、「5日未満」（41人、45%）が最多で、「半年以上」（23人、25.3%）、「1か月以上半年未満」（11人、12.1%）が続く。

Q7-2	期間	人数	%
1	5日未満	41	45.1
2	5～10日間	8	8.8
3	11日以上1か月未満	6	6.6
4	1か月以上半年未満	11	12.1
5	半年以上	23	25.3
6	その他	1	1.1
7	無回答	1	1.1
	回答者数	91	100.0
	Q6で2と回答または、未回答	247	—
	回答者数	338	

○その他

- ・1年程度不定期に

(4) ボランティア活動開始時期（単一回答）

対象者：ボランティア活動に参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

ボランティア活動の開始時期は、「大学3年」（39人、42.9%）が最多で、「大学2年生」（28人、30.8%）、「高校時代」（11人、12.1%）が続く。

Q7-3	実施時期（活動開始時期）	人数	%
1	高校時代	11	12.1
2	大学1年	7	7.7
3	大学2年	28	30.8
4	大学3年	39	42.9
5	大学4年	5	5.5
6	無回答	1	1.1
	回答者数	91	100.0
	Q6で2と回答または、未回答	247	—
	回答者数	338	

(5) ボランティア活動への参加動機（複数回答）

対象者：ボランティア活動に参加したことがある（現在参加している）と回答した学生

ボランティアの参加動機は「人の役に立ちたい、社会に貢献したいから」（50人、55%）が最多で、「参加したNPOの活動テーマに関心があるから」（40人、44%）、「いままでやったことのない経験をしたから」（36人、39.6%）が続く。

Q7-4	NPO でのボランティアに参加した理由 MA 複数回答あり	人数	%
1	NPO に関心があるから	31	34.1
2	ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスに関心があるから	20	22.0
3	参加した NPO の活動テーマに関心があるから	40	44.0
4	人の役に立ちたい、社会に貢献したいから	50	55.0
5	サークルや自分が行っているボランティア活動等に活かしたいから	14	15.4
6	自分の実力が社会で通用するか試してみたいから	6	6.6
7	自分に自信の持てる体験がしたいから	15	16.5
8	働くことがどういうものなのか体験したいから	12	13.2
9	いままでやったことのない経験をしたいから	36	39.6
10	専門知識やスキルを獲得できそうだから	10	12.0
11	大学生生活を有意義に過ごしたいから	28	30.8
12	就職活動に役立ちそうだから	18	19.8
13	大学の授業の一環だから	22	24.2
14	先生や先輩、友人の勧め	21	23.1
15	その他	8	8.8
	回答者数	91	100.0
	Q6 で 2 と回答または、未回答	247	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・小学生のときからまちづくりの NPO と関わりがあり、自然に活動に関わるようになった
- ・高校受験に役立ちそうだから
- ・社会貢献
- ・NPO 団体の人に誘われたから

4 今後について

(1) 今後、在学中に NPO の活動に参加したいと思うか (単一回答)

対象者：全員

今後在学中に NPO の活動参加したいかという質問に対して、「NPO でのインターンシップとボランティア、両方またはいずれか一方に参加したいに参加したい」(135 人、39.9%)が最多で、「NPO でのボランティア活動に参加したい」(80 人、23.7%)、「NPO でのインターンシップとボランティアには参加したいと思わない」(78 人、23.1%)が続く。

Q8	今後、在学中に NPO の活動に参加したいか	人数	%
1	NPO でのインターンシップに参加したい	36	10.7
2	NPO でのボランティアに参加したい	80	23.7
3	NPO でのインターンシップとボランティア、 両方またはいずれか一方に参加したいに参加したい	135	39.9
4	NPO でのインターンシップとボランティアには参加したいと思わない	78	23.1
5	その他	8	2.4
	無回答	1	0.3

	回答者数	338	100.0
--	------	-----	-------

○その他

- ・自分との繋がりがあれば参加したい
- ・代表など、主体的な立場で関わることが決定している。
- ・時間やテーマが合えば、参加してみたいです。
- ・機会があれば
- ・よくわからない
- ・現在実施中のものを続ける予定であり、新しく始める予定はない
- ・NPOの活動内容による。
- ・機会があれば参加したい

(2) 在学中に NPO の活動に参加したいと思わない理由（複数回答）

対象者：「NPOの活動に参加したいと思わない」と回答した学生

在学中に NPO の活動に参加したいと思わない理由として、「NPO の活動に関心はあるがほかにもやることがあり時間が取れないため」(41 人 52.6%)が最多であり、「NPO の活動に関心がないため」(28 人、35.9%)、「NPO でのインターンシップやボランティアについて詳しく知らないため」(17 人、21.8%)が続く。

Q9	参加したいと思わない理由	人数	%
1	NPO の活動に関心がないため	28	35.9
2	NPO の活動に関心はあるがほかにもやることがあり時間が取れないため	41	52.6
3	NPO でのインターンシップやボランティアをやっても得られることは少ないと思うから	8	10.3
4	NPO でのインターンシップやボランティアについて詳しく知らないため	17	21.8
5	既に NPO でのインターンシップやボランティアに参加したから	9	11.5
	無回答	1	1.3
	回答者数	78	100.0
	Q6 で 2 と回答または、未回答	260	—
	総回答数	338	

5 卒業後の NPO との関わりについて

(1) 大学卒業後、NPO の活動に関わることがあると思うか（複数回答）

対象者：全員

卒業後の NPO との関わりについては「ボランティアやプロボノとして NPO の活動に関わりたい」(113 人、33.4%)が最多で、「大学卒業後に NPO の活動に関わることはないと思う」(104 人、30.8%)、「仕事を通じて NPO の活動に関わりたい」(100 人、29.6%)と続く。

Q10	大学卒業後、NPO の活動に関わることがあると思うか	人数	%
1	仕事を通じて NPO の活動に関わりたい	100	29.6
2	ボランティアやプロボノとして NPO の活動に関わりたい	113	33.4
3	会員になることや寄付を通じて NPO の活動の支援をしたい	69	20.4
4	大学卒業後に NPO の活動に関わることはないと思う	104	30.8
5	その他	6	1.8
	回答者数	338	100.0

○その他

- ・やりたいことがなくなったら、そういう活動を地元でしたいと思っている。
- ・参加枠組みがどのようなものになるか検討すべき立場である。
- ・自分の進む道にNPOがあるのであれば、活動に関わることがあるでしょう。
- ・わからない3名

(2) 卒業後の進路 (単一回答)

対象者：全員

卒業後の進路は、「民間企業への就職」(174人、51.1%)が半数を占めており、「公務員(教員以外)」(66人、19.5%)、「今はまだ考えていない」(32人、9.5%)が続く。

Q11	卒業後の進路	人数	%
1	民間企業への就職	174	51.5
2	公務員(教員以外)	66	19.5
3	教員	6	1.78
4	NPOへの就職	3	0.9
5	起業など組織に所属せずに働く	23	6.8
6	家業を継ぐ	1	0.3
7	大学院	12	3.6
8	海外への留学	8	2.4
9	今はまだ考えていない	32	9.5
10	その他	13	3.9
	未回答者	0	0.0
	合計	338	100.0

○その他

- ・福祉職
- ・社会人学生のため、就業継続
- ・施設に就職
- ・ゆくゆくは宣教師として途上国に行きたいと考えています
- ・迷っている
- ・民間企業に就職後大学院への進学を目指している
- ・NPOではないが、非営利経済団体への就職が決定しています。
- ・専門学校へ進学
- ・大学院の進学、もしくは士業を目指している
- ・福祉職
- ・海外で日本語教師として勤務したい。
- ・福祉職を考えている

(3) NPOへの就職を目指すことになったきっかけ (複数回答)

対象者：「NPOへの就職を目指している」と回答した学生

NPOへの就職を目指すきっかけとして、「高校や大学の授業で学んだこと」「NPOでのインターンシップに参加したこと」(3人、100%)が同率で最多であり、「NPOでのボランティア」(2人、66.7%)、「NPOのセミナーやイベントに参加したこと」(1人、33.3%)が続く。

Q12	NPOへ就職するきっかけ	人数	%
1	高校や大学の授業で学んだこと	3	100.0
2	NPOでのインターンシップに参加したこと	3	100.0
3	NPOでのボランティアに参加したこと	2	66.7
4	NPOのセミナーやイベントに参加したこと	1	33.3
5	その他	1	33.3
	回答者数	3	100.0
	Q11で4以外と回答した人	335	—
	総回答者数	338	

○その他

- ・前の質問でその他を選んだが、4を選んだことになりました。

6 回答者について

(1) 学年 (単一回答)

対象者：全員

回答者の学年は、「3年生」(136人、40.2%)が最多で、「2年生」(119人、35.2%)、「1年生」(18人、5.3%)と続く。

	学年	人数	%
1	1年生	18	5.3
2	2年生	119	35.2
3	3年生	136	40.2
4	4年生	56	16.6
5	その他	9	2.7
	未回答者	0	0.0
	合計	338	100.0

○その他

- ・5年
- ・経済学府産業マネジメント専攻1年
- ・修士1年 5名

(2) 性別 (単一回答)

対象者：全員

回答者の性別は、「女性」(196人、58.0%)が最多で、「男性」(136人、40.2%)と続く。

	性別	人数	%
1	女性	196	58.0
2	男性	136	40.2
3	回答しない	5	1.5
4	その他	0	0.2
	無回答	1	0.3
	合計	338	100.0

2 団体アンケート

団体アンケートについては53団体からの回答があった。内訳は、資金分配団体は24件（45.3%）、実行団体は28件（52.8%）、資金分配団体/実行団体は1件（1.9%）となっている。

1. NPO インターンシップについての現状について

(1) NPO インターンシップの受け入れを行ったことがありますか。

	合計	%
a ある	38	71.7
b ない	15	28.3
	53	100.0

(2) 「a. ある を選択」⇒ インターンシップはどのような内容でしたか。

(2)-1 インターンシップの対象者 *複数回答可

	回答数	%
a. 高校生	2	3.4
b. 大学生	38	65.5
c. 大学院生	14	24.1
d. その他：社会人	3	5.2
d. その他：他組織のスタッフ	1	1.7
合計	58	100.0

(2)-2 インターンシップの期間 *複数選択可

	回答数	%
a 5日未満	7	10.9
b 5～10日間	13	20.3
c 11日～1か月	15	23.4
d 1か月～半年	17	26.5
e 半年以上	11	17.1
f 1年	1	1.5
合計	64	100.0

(2)-3 インターンシップの概要

	回答数	%
a. 体験型（対人支援で一緒に参加）	24	37.5
b. プロジェクト型（イベント実施、広報・クラウドファンディングなど）	18	28.1
c. スタッフ型（事務局として、会議に参加したり、かばん持ちなど）	19	29.7
d. その他（チーム活動、クラファン）	3	4.7
合計	64	100.0

(2)-4 インターンシップの具体的な活動内容

事務の手伝いや調査が多かったと思います。
スタッフと共に活動する
食品取り扱い量の（寄付量や譲渡量）の入力、イベント補助

広報支援、現場でのインターンシップ
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども向けのイベントの企画、不登校児の親向けの交流会の運営補助 ・保護者向けのワークショップの開発、イベントの運営補助
<ul style="list-style-type: none"> ・重度障害者支援施設の「駄菓子屋」にて、地域の子どもたちに土日解放することについてのプロジェクト ・町づくりのプロジェクト ・祭り等の補助
主に現場でのユースワーク、イベントの企画・運営など
食品企業からの食品提供の調整、広報（HP、SNS 発信、プレスリリースの作成）その他事務作業全般
上記8にある通り、事務作業や会議の準備＆参加などがおもな活動内容となりました。
自社が各団体に提供するクラウドファンディングのサポート進行業務（情報整理・画像やテキストの管理・原稿作成など社員の実務サポート）
助成金の報告会運営補助、助成先の活動への体験参加など
支援対象者向け WorkShop での司会・ファシリ・書記、SNS 投稿等。
会議への同行・参加、イベント当日の運営お手伝い、活動団体先（こども食堂や配食サービス等）を紹介し実際に活動するなど
会議の参加、SNS の発信サポート、展示会出展サポート
英文論文の翻訳
<ul style="list-style-type: none"> ・社員等と同様、RCF の業務のメンバーとして参画してもらっている ープロジェクト運用上必要な業務の推進 ー内部的な手続き等の事務面での業務推進
現場及び事務スタッフの補助、調査業務、レポート作成、イベント開催補助など
<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災・東北での活動の後方支援、災害ボランティア派遣業務サポート ・国内外の被災地支援のプロジェクト活動の立ち上げサポート ・防災・減災に向けたプロジェクト、人材育成プログラムの活動サポート ・全国でのボランティアセミナー、報告会、各種イベントの立案・実施・報告 ・その他、WEB や会報紙のデザイン、被災地での災害ボランティア活動、翻訳・インターナショナル・ボランティア派遣業務など様々
主には、事務所作業と、学習支援室での活動（学習支援室の運営に関わる作業と、実際に子ども達の学習支援をする）となります。
運営している居場所にスタッフやボランティアと同じように入ってもらい、支援対象者の若者と一緒にすごしてもらったり、居場所でのイベントの企画運営をしてもらっています
<ul style="list-style-type: none"> ・当法人のイベントを当法人スタッフと一緒に準備、企画、運営 ・法人のアンケート制作および実施 ・法人の資料を英語に翻訳、資料作成 ・支援企業との調整補助、会議参加
労働相談対応、労働法教育、相談集計作業、SNS 配信など
当クラブの調査研究事業、プロジェクト、広報活動で、大学での専攻や研究を活かして、協働で関わってもらえる活動
支援策訪問同行 会議開催補助
Instagramによる広報活動
リユースマーケットの企画・運営、ながのこどもわくわくカフェでのお楽しみ企画・運営（実習課題の確認→企画案の作成→確認→企画調整・準備→実施→企画の振り返り）
芝居小屋の案内、農業体験を通じてを山村的暮らしを知る
国内留学
ホームレス支援でアウトリーチを一緒に行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ生が本インターンシップの目的、インターンシップを通じて何を学びたいのかによって個別相談の上、内容を決定

<ul style="list-style-type: none"> ・イベント運営における当日ボランティア的な位置づけのインターンを行っています。 ・プロジェクト型においては、教育機関と連携し、事業対象者に向けた企画運営から実施までをインターンプロジェクトチームをつくって行っています。 ・スタッフ型では、日常業務などの事務作業など業務全般に横断的に携わる、例に上げていただいているような韋持ち的なスタイルでのインターンを行っています。 ・上記において教育的な要素を除く事務作業等やライティングについては適宜有給で行っています。
<p>環境 NPO として、公害や環境、地域コミュニティの問題など経済活動の中では解決できない社会の課題を学び、それに対し自分で考え行動する力を養って欲しいと考えています。学生からの希望を踏まえて、進行形のプロジェクトに参加してもらう場合もあれば、提案型のプロジェクトを進める場合もあります。具体的には、①インクルーシブサイクリングや子ども自転車教室などの自転車を活かした活動、②地域の交流イベント「みてアート」への参加、③防災の取組み、④環境保健－呼吸リハビリテーションの普及、⑤公害・環境学習プログラムの実施、⑥資料館の運営、⑦国際交流など。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・寄付月間の取組の企画運営など、各種事業に対する企画運営 等 ・各部署における就業体験 ・各部署におけるセミナー等の事業運営補助
<p>中国環境パートナーシップオフィス（EPO ちゅうごく）事業のサポート。イベント補佐等。</p>
<p>子ども向けイベントの補助要員をお願いしました。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・団体の活動や災害についての研修 ・被災地での活動(体験型) ・オンラインイベントの企画、開催
<p>フードバンクかごしまでは学生チームを組織しており、鹿児島県内の大学生に自分たちでやりたいことを計画し実行するものやこちらの活動への参加の呼びかけを行ったりしております。またインターン生の受け入れも行っており、上記の学生チームと交流をしたり、また各種インターン体験発表会への参加のサポートを行っております。</p>
<p>プロジェクトのスタッフとして</p>

(2)-5 インターンシップを実施してきた上での課題

<p>事前の準備をしておかないと、満足してもらえるインターンシップにならないこと</p>
<p>戦力としては期間が短い</p>
<p>学生の継続的な参加の難しさ（特に学生でボランティアとインターンの線引きができていない場合など）</p>
<p>責任範囲と契約がなかなか守られない時の対応</p>
<p>学生自身の予定（忙しさの波がある）とこちらの運営上のスケジュールがなかなか合わず、打ち合わせやコミュニケーションがあまりうまく行きませんでした。</p>
<p>実施後のアフターフォローが不十分だったのか、継続性に課題あり。</p>
<p>地方における採用</p>
<p>安定的に人材を確保することができない。 6ヶ月以上の期間のため、途中で辞めてしまう人も若干いる。</p>
<p>お客さん扱いになりがちな点</p>
<p>他部門ではありますが以下などがポイントになっているのかなと思っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標設計 ・モチベーションの維持拡大 ・業務内容の設計（権限・作業依頼範囲） ・アウトプットイメージのすりあわせ
<p>インターンに限らず、若手や中堅社員に対しても同様の勘所があると思います。 違いをあげれば、社会人経験が無いことでの、期待値あわせなどは重要な点だと思います。</p>
<p>受け入れる際の担当者（インターン生の世話）の負担がかなり大きくなる点</p>
<p>稼働時間</p>

大学の意向と当会で期待することとのマッチングが上手くいかないことがありました。
学生に有用なプログラムを組成できるキャパシティがない
とくになし
<ul style="list-style-type: none"> ・社員等と同様に、業務を担っていただいているため、業務へのコミットメントを保持し、継続していただくことが重要であり、その継続に向けたフォローについて、課題が生じている ー1on1にて、月1回程度話す ー業務を進める上で、意味合いも含めて丁寧に説明する ・社員等のサポートに負担がかかり、追加の業務となる可能性がある(フォローアップが発生・業務完了ができず、スタッフフォローが発生等)
就活の関係で予定期間より早く辞めてしまう学生が少なからずいる。
交通費はでるが基本無償のため、問い合わせがあっても条件面で合わないということがある。
受入れ期間中の課題はそこまでないが、応募があった際に、組織側に受け入れ体制として人員に余力がないときは応募を断ざるを得ないときがある。また、数か月単位の募集期間で募集を打ち出しているが、ほとんどの学生が1週間から2週間程度の希望が多く、需要と供給があっていない場合があり、インターンを積極的に受け入れたいとは思っていても上記にあげたような課題がある。
学生がインターンシップをする上での目的意識、ゴールが明確であることが多く、出来る限りそれに沿った形での活動を計画することが可能であるため、学生の活動自体に課題を感じることは少ないように思います。
受け入れ側(当団体)の体制として、ときに、学生への対応に十分な時間を割くことが出来ず、振り返りの時間を十分にとることが出来ない、学生に行ってもらう作業を作り出すのが困難と感ずることがある、といった課題がありました。
インターンの学生により取り組みの熱心度が異なることがありますが、特に大きな課題としては考えていません
内容と期間、個別能力と業務とのマッチング
スケジュールリング
県外の大学生の受け入れだったため、長期の場合、宿泊、交通、など生活面での支援が欠かせないこと。
就職との接続
<p>遠方からの受入であるため、オンラインによるやりとりが多かった。</p> <p>ソーシャルセクターはヒト対ヒトの関係性が重要になってくるため、インターンシップ期間は現地での実施が望ましい。また短期の受入は双方にとって実のある活動にはなりにくく、表向きの実績作りにはしかならない。まず現在の活動を理解してもらうことに時間がかかる上に、それを前提にしなければ受入側の負担ばかりが大きくなる危険性がある。</p>
連続している日々の事業の中で、関われる時間の調整が課題
学生さんの費用(交通費・宿泊費)の問題
特になし
<ul style="list-style-type: none"> ・当社の場合でいくと、希望者を全員受け入れているわけではなく、自主的に取り組みたい方を中心に行なっているため特に問題は感じていません。大学の講義の一環として短期で参加される方については意欲やモチベーションの違いを感じることは過去ありました。 ・体験、実践などをインターンをうけてくださる方の思いは様々ですが、こちらの期待と目標でのマッチングには毎回課題を感じています。
学生の意向を踏まえた実践型の取り組みを進める中で、学生からの取り組みへの希望が無い場合、意欲が少ない場合のモチベーションの維持に苦心している。コロナ禍で対面型の活動が制限されてきたことも課題であった。
<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップにおける出口支援 ・学部の特徴や学生の理解度に応じたプログラム提供
受入団体として体制をうまく組むことが出来ず、組織ではなく事業体験になりがち。
有償だとしても、実施場所によっては公共交通機関に限られるため、こちらが移動手段を用意しないと応募者が集まらない場合がある。

<ul style="list-style-type: none"> ・コロナによる行動制限がある期間であったため、オンラインによる対応をせざるを得ず、受け入れコストが大きかった。 ・インターン受け入れを提案してきた団体の提供サービスが学生にとっては有料である旨の説明がなく、また当会へのコンタクトも全て学生スタッフによるものであったため、その団体に対する不信感が生じた。 ・アルバイトとインターンシップの明確な違いをイメージできず、受け入れ側の責務が分からなかった。事前研修など良いと思われた。 ・研修等行わないと実務は難しいため、手間がかかる。また、必ずしも団体のミッションに興味・関心がある学生が来るとは限らない点。また、アルバイトとの差異も気になることです。
インターンシップ推進団体等が間に入った場合にあまりにも学生をお客様扱いしているところがあり、結果としてこちらの伝えたいことが何も伝えきれないままインターンが終了するなどの弊害があります。
優秀な方だったので正直戦力となってよかった。特に課題は感じていない

(3) 「b. を選択」⇒ インターンを受け入れにくい団体側の理由は何ですか

内容	回答数	%
a 必要性を感じない	3	20.0
b 事業内容にその余裕がない	3	20.0
c 担当するスタッフの余裕がない	3	20.0
d 手間がかかりすぎる	0	0.0
e 自団体だけでは難しい（コーディネートができない）	0	0.0
f 自由筆記：依頼がなかった、特にそのような話が来なかった、機会がなかった	4	26.7
f 自由筆記：事業内容の専門性が高すぎるため	1	7.1
f 自由筆記：まだ設立中のため	1	7.1
合計	15	100.0

2. 今後について

(4) 中長期的（2週間以上）のインターン受け入れをどう考えていますか

	資金分配団体	実行団体	資金分配団体/ 実行団体	計	%
a 受け入れは考えていない	6	1		7	13.2
b 体制を整えば受け入れたい	12	11	1	24	45.3
c インターンシップ受入に関するサポートがあれば受け入れたい	1	5		6	11.3
d 積極的に受け入れたい	5	11		16	30.2
	24	28	1	53	100.0

(5) 「a」を選択⇒ 受け入れない理由は何ですか *複数回答可能

	回答数	%
a. 必要性を感じない	0	0.0
b. 事業内容にその余裕がない	2	18.2
c. 担当するスタッフの余裕がない	3	27.3

d. 手間がかかりすぎる	3	27.3
e. 自団体だけでは難しい（コーディネートができない）	0	0.0
f. 自由筆記：2週間では短すぎる。業務を覚える前に終わってしまう	1	9.1
f. 自由筆記：その後採用に結びつくかどうかの確度次第	1	9.1
f. 自由筆記：会社独自で受け入れを行なっているため	1	9.1
合計	11	100.0

(6) 「b, c, d を選択」⇒ 受入れの目的は何でしょうか。

内容	回答数	%
a. 若い世代との交流	8	17.4
b. スタッフの短期的拡充	1	2.2
c. ステークホルダーの拡充・啓発	10	21.7
d. 将来の雇用	8	17.4
e. 社会貢献	5	10.9
f. （地域）社会へのアピール	0	0.0
g. 人材育成力の強化（組織力強化）	9	19.6
h. 自由筆記：短期間では支援対象者との関係性が築けにくい	1	2.2
h. 自由筆記：業務遂行上の人員確保、学生においてもコーディネーター育成、将来的なネットワーク構築	1	2.2
h. 自由筆記：将来を担う若い世代の皆さんに、外国ルーツ青少年について理解を深める場を少しでも提供できれば	1	2.2
h. 自由筆記：若い世代の感性や意見の取り入れ	1	2.2
h. 自由筆記：若い世代の育成（シティズンシップ教育の一端として）	1	2.2
合計	46	100.0

(7) 「b, c, d を選択」⇒ インターンを受け入れるための団体側の要件は何ですか *複数回答可

内容	回答数	%
a. 学生のレベル・専門性が一定以上あること	14	24.6
b. 期間が短いこと	1	1.8
c. 期間が長いこと	6	10.5
d. 団体スタッフの負担が少ないこと	17	29.8
e. 団体の金銭的負担がないこと	12	21.1
f. 自由筆記：団体の事業内容・取り組む問題に対する関心が高いこと；	4	7.0
f. 自由筆記：担ってもらえる業務など受入れ体制を整えておくこと	1	1.8
f. 自由筆記：当人の希望と意欲がこちらが提供できるものと一致していること；	1	1.8
f. 自由筆記：インターンシップに求める事柄が団体と送り出し側（大学等）とで、一定合致していること；	1	1.8
	57	100.0

3. JANPIA の行う NPO インターンシップ・プログラムについてのご意見

(8) JANPIA がインターンシップ・プログラムを提供することについて、どう思いますか

	回答数	%
a. 参加したい	31	58.5

b. 未定	16	30.2
c. 関心がない	2	3.8
d. その他	4	7.5
合計	53	100.0

その他回答内容

記事執筆等に興味のある方がいれば
特殊な活動をしているため、プログラムの内容が適しているかに疑問がある
参加される方の動機や目的に応じて判断したい

3 団体スタッフアンケート

回答者は 47 人、有効回答率は 100%であった。

1 回答者情報

(1)所属（自由記述）

対象者：全員

回答者の所属団体は以下のとおりである。

NPO 法人 わがこと
JANPIA
NPO 法人いいだ人形劇センター
NPO 法人ひろしま NPO センター
トク特定非営利活動法人両全トウネサーレ
セカンドハーベスト・ジャパン
フードバンクかごしま
ピースボート災害支援センター
ほくりくみらい基金準備委員会
一般財団法人大阪府人権協会
ほくりくみらい基金準備委員会
一般財団法人大阪府地域支援人権金融公社
一般社団法人全国フードバンク推進協議会
一般社団法人全国食支援活動協力会
一般社団法人 SINKa
一般社団法人いじめ構造変革プラットフォーム
一般社団法人 RCF
一般社団法人日本民間公益活動連携機構
全国コミュニティ財団協会
更生保護法人ウィズ広島
国際協力 NGO センター
大阪府地域支援人権金融公社
特定非営利活動法人岡山 NPO センター
特定非営利活動法人宮崎文化本舗
認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
特定非営利活動法人こどもたちのこどもたちのこどもたちのために
日本更生保護協会
特定非営利活動法人いいだ人形劇センター
特定非営利活動法人まつど NPO 協議会

(2) 年齢（単一回答）

対象者：全員

回答者の年齢は、「30代」が最多(21人 44.7%)で、「40代」(18人 38.3%)「20代」(8.5%)が続く。

D	年齢	人数	%
a	10代	0	0.0
b	20代	4	8.5
c	30代	21	44.7
d	40代	18	38.3
e	50代	2	4.2
f	60代以上	2	4.3
	総回答者数	47	100.0

(3) ジェンダー（単一回答）

対象者：全員

回答者のジェンダーは、「女性」(28人 59.6%)が最多である。

E	ジェンダー	人数	%
1	男性	18	38.3
2	女性	28	59.6
3	その他	1	2.1
	総回答者数	47	100.0

(4) ソーシャルセクターでの勤務年数（単一回答）

対象者：全員

ソーシャルセクターでの勤務年数は、「5～10年以内」(14人 29.8%)と最多であり、「1～4年以内」(12人 25.5%)、「10～20年以内」(9人 19.1%)が続く。

F	ソーシャルセクターでの勤務年数	人数	%
1	1年以内	7	14.9
2	1～3年以内	3	6.4
2	1～4年以内	12	25.5
3	5～10年以内	14	29.8
4	10～20年以内	9	19.1
5	20年以上	2	4.3
	総回答者数	47	100.0

(5) 役職（単一回答）

対象者：全員

回答者の役職は「社員・職員(32人 68.1%)」が最多であり、「代表・理事・役員(9人 19.1%)」、「アルバイト・パート・派遣(4人 8.5%)」と続く。

G	役職 SA	人数	%
1	代表・理事・役員	9	19.1
2	社員・職員	32	68.1
3	アルバイト・パート・派遣	4	8.5
4	その他	2	4.3
	総回答者数	47	100.0

(6) 休眠預金との関わり (単一回答)

対象者：全員

「休眠預金と関わっている(42人 89.4%)」が最多であった。

H	休眠預金事業との関わり SA	人数	%
1	休眠預金と関わってる	42	89.4
2	休眠預金と関わっていない	5	10.6
	総回答者数	47	100.0

(7)-1 勤務場所 (単一回答)

対象者：全員

勤務場所については、「出勤中心(28人 59.6%)」が最多であった。

I	現在の働き方	人数	%
1	出勤中心	28	59.6
2	リモートワーク中心	19	40.4
	総回答者数	47	100.0

(7)-2 勤務形態 (単一回答)

対象者：全員

勤務形態は、「フルタイム・常勤(38人 80.9%)」が最多であり、「パートタイム・非常勤(9人 19.1%)」が続いた。

I-2	勤務形態	人数	%
1	フルタイム・常勤	38	80.9
2	パートタイム・非常勤	9	19.1
	総回答者数	47	100.0

(7)-3 給与の有無 (単一回答)

対象者：全員

給与の有無については、「フルタイム・常勤(46人 97.9%)」が最多であった。

I-3	給与の有無	人数	%
1	有給	46	97.9
2	無給	1	2.1
	総回答者数	47	100.0

(7)-4 兼業の有無 (単一回答)

対象者：全員

兼業については、「兼業・副業あり(20人42.6%)」が最多であった。

I-4	兼業の有無	人数	%
1	兼業・副業あり	20	42.6
2	兼業・副業なし	27	57.4
	総回答者数	47	100.0

(7)-5 働き方 (自由記述)

対象者：特徴的な働き方をされている方

回答者の行っている特徴的な働き方は、以下のとおりである。

プロジェクトの責任者として、役割を明確化して業務を統括している
発災時には、現地に数か月常駐しての支援活動を行います。
ソーシャルセクター、NPOセクター4団体に所属
士業との兼業
自らも一般社団法人の代表をしながら、コミュニティ財団の立ち上げに携わっています。
他NPOにインターン中。
自身の事業の運営。
更生保護施設退所者フォローアップ支援員
遊びと仕事の領域が重なっている(区別のつきにくい部分がある)

2 これまでの経験

(1) ソーシャルセクターでのインターンシップ・ボランティア・アルバイトの経験の有無(単一回答)

対象者：全員

ソーシャルセクターでのインターンシップ・ボランティア・アルバイトの経験については、「NPO等でのボランティア(19人40.4%)」が最多であり、「ない(14人29.8%)」、「複数回体験(11人23.4%)」が続く。

1	ソーシャルセクターでのインターンシップ・ボランティア・アルバイト経験の有無 SA	人数	%
a	NPO等でのアルバイト	2	4.3
b	NPO等でのインターンシップ	1	2.1
c	NPO等でのボランティア	19	40.4
d	複数回体験	11	23.4
e	ない	14	29.8
	総回答者数	47	100.0

(2) ソーシャルセクターでの活動経験の時期(単一回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

ソーシャルセクターでの活動時期は、「社会人(23人 69.7%)」が最多で、「大学生・短大時代(16人 48.5%)」、「大学院時代(5人 15.2%)」が続く。

2	経験した時期 MA	人数	%
a	高校時代	3	9.1
b	大学生・短大時代	16	48.5
c	大学院時代	5	15.2
d	社会人時代	23	69.7
e	その他	0	0.0
	回答者数	33	100.0
	1でeと回答または、未回答	14	—
	総回答者数	47	—

(3) ソーシャルセクターでの活動経験の期間(単一回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

ソーシャルセクターでの活動期間は、「半年以上(17人 51.5%)」が最多で、「5日未満(8人 24.3%)」、「5～10日未満(2人 6.1%)」が続く。

3	体験した期間	人数	%
a	5日未満	8	24.2
b	5～10日間	2	6.1
c	11日以上1か月未満	1	3.0
d	1か月以上半年未満	5	15.2
e	半年以上	17	51.5
	回答者数	33	100.0
	1でeと回答または、未回答	14	—
	総回答者数	47	—

(4) ソーシャルセクターでの活動内容(複数回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

ソーシャルセクターでの体験した内容は、「体験型(21人 63.6%)」が最多で、「スタッフ型(19人 57.6%)」、「プロジェクト型(15人 45.5%)」が続く。

4	体験した内容 MA	人数	%
a	体験型	21	63.6
b	プロジェクト型	15	45.5
c	スタッフ型	19	57.6
d	その他	1	3.0

回答者数	33	100.0
1でeと回答または、未回答	14	—
総回答者数	47	—

(5) ソーシャルセクターでの具体的な活動内容(記述)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

回答者のソーシャルセクターでの経験は、具体的に以下のとおりである。

フードバンク活動全般のボランティア
福祉系のスポーツイベントの運営支援。
<p><ボランティア></p> <ul style="list-style-type: none"> ・単発のイベントや清掃や夜回りなどへ参加 ・ボランティアの受け入れをコーディネートするボランティア <p><インターン></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア養成講座の内容を考え提案する ・ほかのインターン生の受け入れプログラムをつくり、受け入れ担当をする <p><アルバイト></p> <ul style="list-style-type: none"> ・講座など企画し助成金を申請して、採択されればその内容を実施する <p>など複数</p>
子ども向けの体験活動
市民活動支援センターの受付業務
JICA、ピースポート災害支援センターにて、データや資料のとりまとめ、企画書・提案書・報告書等の作成、会議出席、プレゼン、資料の作成、研修受講、スタディーツアーの企画・実施などを行いました。
殺処分対象の犬を保護し、譲渡に繋げる団体で保護犬のお世話等のボランティア活動
地域のイベント運営の補助ボランティア
【1日や短期のボランティア】障がい者を支援する団体の障がい者の遠足の車いす押し、クリスマスイベントの企画運営、販売用の手作り小物作成ボランティア、ご老人の話し相手ボランティア、【継続したもの】大学生向けの食生活相談会やスポーツ大会などの企画運営、環境団体の子どものクイズの赤ペン先生、施設（老人ホームやハンセン病患者、重度障碍児の施設等）での掃除や洗濯ものたたみ、雑草抜きなどのお手伝い、子ども向け山登りイベントや球技のコーチのボランティア、など
NPOに所属し、イベントの企画～運営、資料作成、会計処理、司会進行、人事、総務、など様々経験しました。
防災イベントの運営スタッフ
<ul style="list-style-type: none"> ・セミナーの運営（設営、丁合、受付など） ・ゴミ拾い ・会議議事録 ・学生 NPO スタッフとして資金調達 ・事業（海外インターンシップ制度）の運用 ・事務局運用” ・東南アジア諸国での住居建設ボランティア（2週間程度） ・議員インターンシップ（選挙活動の手伝い・2か月程度） ・NPO 法人の学生支部 事務・企画運営スタッフ（2年程度）
イベント実施に当たり金銭管理などを行いました。
会員同士のレクリエーション、街頭補導、更生保護活動、セミナー実施、勉強会実施、居場所事業、子育て支援
インターンシップとしてではなく、ボランティアとして団体に所属し活動を行なっています

HIVの予防啓発を行う団体で定例会議の参加、その他イベント参加（出展）、高校や大学での授業を行なっています。
インターンシップではなくプロボノですが、最初はサービスグラントの半年間のプロジェクトで事業計画の提案を行いました。その後、同じ団体についてイベント支援を中心にプロボノを継続しています。
また、昨年から卒業した社会人大学院の学生・卒業生とソーシャルセクターのプロボノマッチングと伴走支援を行っています。
・沿岸部の重油回収作業 ・フードバンクでの配送
生活相談対応、食品配布
ひきこもりの方の居場所、外出の機会提供
困難を抱える子どもの学習支援・余暇支援活動への参加、関連セクターとの打ち合わせ参加など
大学コンソーシアムが運営する法人へのインターンシップの機会があった。企業ではなく、その時にしか関わることがないであろう場所を選択した。
今でいう居場所づくり施設において、ヒップホップ参加者の記録を撮り、動画を製作、鑑賞会を実施した。
施設内に通う同性代の大学生・院生スタッフといっしょにカフェコーナーの設置・運営。
16ミリ映画観賞会の実施。
ひきこもりの子たちに寄り添う支援。
人形劇公演、事業展開
NPOの若者支援事業における有償のインターンシップ
社会的養護出身の若者への支援プロジェクト
ファンレイジングイベントの企画、実施
・書類作成、リサーチ補助、報告書作成補助など ・国内NGOのパートナー団体（インドネシア）での活動体験、日本からの資金調達のリサーチ、スタディツアーの引率等。 ・事務局のお手伝い（所轄庁への報告書類作成、会計の仕組みづくり/日々の会計処理など） ・ふーどばんくの配送ボランティア ・海外への図書支援・交流活動
発展途上国での有機農法普及活動

(6) ソーシャルセクターでの活動経験は現在、役に立っているか(単数回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

これまで経験したソーシャルセクターでの活動を、「大いに役立っている(15人 45.5%)」が最多で、「少し役立っている(13人 39.4%)」、「ほぼ役立っていない(4人 12.1%)」が続く。

5 経験は仕事に役立っているか SA	人数	%
a 大いに役立っている	15	45.5
b 少し役立っている	13	39.4
c ほぼ役立っていない	4	12.1
d その他	1	3.0
回答者数	33	100.0
1でeと回答または、未回答	14	—
総回答者数	47	—

(7) 経験が役立つ具体的な内容やエピソード(自由記述)
 対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

ソーシャルセクターでの活動が役立つ具体的な内容やエピソードは、以下の通りである。

本格的にフードバンク活動に従事する前に、その活動の中身について触れる機会ができた。
活動に対する理解度が向上した。
高齢者との対話メインとなる現場で、その際のやり取りが今も役に立っている。
学生時代から活動しているボランティア団体が NPO 法人化しいまもボランティアとして関わっている。ソーシャルセクターに関わるきっかけになった。
そのまま就職しました。
災害に関するチーム、団体でのインターンだったため、被災地域や防災減災に取り組んでいる地域に実際に赴くことや災害に関する研修を受講する機会もあり、仕事につながる経験や知識を培うことができました。また、ODA 実施機関である JICA と国内外の災害支援を行うピースポート災害支援センターでインターンしたことで、国際的な視点、草の根の視点での災害支援、防災減災を知り、比較することができました。
社会や地域を良くするために様々な分野で活動している人がいると知れたことが今の仕事に就くきっかけになりました。
ハンセン病患者さんの療養所で、雑草抜きなどを行なった後に交流をした。事前の学習で、ハンセン病特有の身体の変形などを目にするるとともに、過去は隔離され続けた患者さんたちの悲しい過去を知った。しかし、目の前の患者さんたちのやさしさに触れた経験は、私にとってかけがえのないものになった。そのほか、重度の障害を持つ子どもたちと学生時代に出会ったこともよかった。大人になってから、仕事で障碍児（水頭症）を伴うお母さんに会ったとき、一緒にいた同僚は子どもを凝視して固まってしまい対応が全然できなかった。私の方は子どもに挨拶し、お母さんとお話することができた。経験は意外なタイミングで生きることもある。
人の前にたち、意見を述べたり、司会進行を行うこと
資料作成など
色々な防災体験ができるブースでのレクチャー担当をしたのですが、事前学習テキストなどはなく、当日現場に行き「はい、じゃあ次やってみて」と言われて、見様見真似で実施しました。とても緊張しましたが、これまで知らない防災知識が身につく、子どもたちの反応も良く、よい思い出になりました。
・基礎的な NPO の知識、主要な NPO, NGO のベース知識
直接的に役立つ訳ではないが、具体的に働くにあたりどのようなステークホルダーと関わるのかイメージができた。
学生を「1人の人間として」歓迎してくれたどうかは、とても分かる。歓迎会は大事。
人としてとらえているところは、自身の経験値になる。制度の狭間やアプローチ方法など、課題に気づくことができる。人とのつながりが増える。
イベントの企画、運営を自身で行った経験から、現在の仕事で運営準備等を比較的スムーズに進められるため。
一緒に活動する中で、NPO やソーシャルセクターの方の考え方、感じ方を理解できることです。
他者の困りごとに寄り添い心を寄せて取り組みを進める点は、現在の休眠預金活用事業の伴走支援時やその他相談事業等に役立っている。
直接的に役立っている訳ではないが、生活相談においては様々な要因から困窮状態に至ってしまう方の背景について知ることができ、現在の職域と隣接する困窮者支援の現場についての下知識がついた。
基本的に引きこもりの方とのかかわり方、距離感の取り方について学んだので、直接支援で役立つ。
直接支援の NPO の活動イメージをもつことができる
・学生時代は少しの共通点ですぐに仲良くなれるという感覚を持っていたが、施設に通う引きこもりがちな子どもと接した時に、時間をかけて徐々に距離を縮めていかなければならないことに気づかされた。そう簡単に心を許し合える関係性は築けない。
企画計画をし、実行できる現場であった

主体的に責任を持って行うプロジェクトマネジメントの体験をすることができた
学生時代に書類や報告書作成に基礎に触れられたことはその後大変役に立った。いろいろな人と触れ合うことができ、キャリアのパターンを知ることができた。
組織運営方法など

(8) ソーシャルセクターでの活動を学生に勧めるか(単数回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

自身の経験からソーシャルセクターでのインターンシップ等を学生に勧めるかという質問に対して、「大いに勧める(21人 63.6%)」が最多で、「その他(10人 30.3%)」、「あまり勧めない(2人 6.1%)」が続く。

6	ご自身の体験から、ソーシャルセクターでのインターンシップ等を学生に進めるか	人数	%
a	大いに勧める	21	63.6
b	内容によっては勧める	0	0.0
c	あまり勧めない	2	6.1
d	その他	10	30.3
	回答者数	33	100.0
	1でeと回答または、未回答	14	—
	総回答者数	47	—

(9) 上記の回答理由(記述)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのある人

全問で回答した理由は、以下の通りである。

○あまり勧めない○

- 他者から勧められて参加すると、モチベーションの面で続くか心配。自ら参加したいと思う方が参加する方が良いと思うため。

○どちらともいえない○

- 学生さんがそのインターンになにを期待するかによるのかなと思います。
- ソーシャルセクターも、一般企業も、インターンシップやアルバイト先として同じように(どちらか一方や、特定の組織を強く勧めるのではなく)選択できることが望ましいと思う。
- 【NPO 時代】在籍者が少ないゆえ、仕事量が多く、残業時間も多い。仕事にのめりこむあまり、家庭や自己啓発などの時間は犠牲になることが多かった。好きなことをしているので、仕事自体は楽しいし、経験することも多く時間はあっという間だったが、体を壊してしまった。
- 【JANPIA】人数が少なく、仕事量が多いのは否めないが、家庭との両立などバランスよく仕事ができていると感じている。
- 勧めたいと思うが、その時には企業のインターンシップなど色々な選択肢の一つとしての提示になると思う。企業インターンシップにもメリットがあると感じられるため。
- 知ってもらう(団体側)メリットはある
- 給与や福利厚生の中で新卒の就職先としては勧めない(団体側も人材育成の手間がかかる)
- 活動や理念を知ってもらうことが大切だが、ある程度経験を積んで「できること」が増えてから関わったほうがよいと思う。
- インターンシップの経験も貴重な機会だが、学生時代は基本学業や学生生活に専念し、インターン

シップ等に費やす時間や負担は増えすぎない方がのよいと思うから。

- 様々な経験・体験をすること自体は有意義だと思いますが、経済性を考慮しない人材が多くなる懸念もあるのではないのでしょうか。
- インターンをただの下働きとして扱っているところも見受けられ、十分な経験をできるかは内部のインターン担当者に大きく依存するため。
- 何を選択するかは人それぞれだから。
- 本人の意識次第である。重要なのは能動的なかかわりであって、周りの雰囲気に合わせて参加されてもかえって受入側の負担にしかならないと思う。ソーシャルセクターに関わる方々はおそらく社会奉仕の精神が高かったり、実際に身近な人たちを支援したいという思いを持った方々が多いと予想されるため、好意的に受け入れるとは思いますが、双方にとって有益な時間になるかは学生自身の姿勢によるところが大きいのではないか。

○大いに勧める○

- 学生にとっても社会にでるまえにビジネスマナーや大人とコミュニケーションを取る機会になるため、社会経験や自己成長につながる。
- また若いうちから社会問題に携わることで、将来的にソーシャルセクターの実務者または支援者になる可能性が高まる。また、就職活動にも有利に働く。
- 企業とは異なる視点を持ってインターンに取り組める。民間企業等へ就職したとしてもその経験は活かせると感じる
- インターンを学生のうちにしておくことで、ソーシャルセクター（特に市民セクター）での就職のメリット・デメリットを知ったうえで就職することが大切だと思うから。
- 社会課題や解決するための考え方について、視野が広がる。
- 会社や大学以外の仲間ができる。
- 様々な人たちに触れることで、様々な人に思いをはせられる人になることができると思う。それは多様性について自然に考えられる人間になること。そのような体験をした人たちが社会に増え、様々な場所で活躍することで、やさしい社会になっていくと考えるから。また、自分自身が弱い立場になることもある。そんなとき助けてくれる場所を知っていることも大切なことだと思う。
- アルバイトだけでは見れない世界を見ることができる機会だから
- 今後キャリアにおいて、ソーシャル・ビジネスの境目がなくなるであろうから
- 非営利セクターでの働き方や必要なスキルを肌感覚で掴むことができるから。
- 良い経験になる。自身にとって心地いい場所になる。
- 学生時代に多様な価値観に触れることができるため。普段接する大人は何らかの企業に勤めていることがほとんどだと思うので、全く違う原動力で動いている方達と触れ合うことは貴重な経験になるのではと思います。
- 学生に限らず多くの体験や経験はその人の人生を豊かにすると感じるため。その体験が嫌なことであつたとしても、その後の人生に役立つと感じています。
- どこに就職したとしても、社会課題解決にかかわることになるから。社会課題に自分ならどのようにコミットするか、考えるきっかけになるから。
- ビジネスや制度福祉とは異なる側面から社会に働きかける人がいることやその実際を、中に入って知ることで、既存の価値観とは異なる視点と柔軟性をもつことができる。結果として、自身と社会との関わりを見出すことができ、働く・暮らすがおもしろくなる。
- 住んでもない土地の文化などを知れて、若い世代の感覚を發揮できるから
- 今勤務している、またこれまで勤務した団体において大学生のインターンが大いに活躍し、また彼らの社会経験にも役立っており Win-Win の関係だと感じているから。
- 社会課題のリアルな現場に触れることができる。ソーシャルセクターに関わる人と知り合うことができ、視野が視野が広がったり、将来を考えることに役に立つ。家や学校以外の相談できる人との関わりができる。など。
- 起業したいとおもうひとは、なぜ起業したいのか。事業をするには目的がいるが、だいたいの企業は社会の課題に寄与することを通して成り立っているのではないか。つまり社会課題はなにかを持っておく必要があるので、学生のインターンを通して、どういった社会課題があるのかを発見することは大事であると考ええる。

- 学生の生活圏では経験できない体験ができ、その後の人生を考える良いきっかけとなる。

(10) ソーシャルセクターでの活動内容(複数回答)

対象者：ソーシャルセクターでの活動を経験したことのない人

ソーシャルセクターでの体験をしなかった理由として、「機会・情報がなかった(10人 71.4%)」が最多で、「関心がなかった(3人 21.4%)」と続く。

7	ソーシャルセクターでの体験をしなかった理由 MA	人数	%
a	機会・情報がなかった	10	71.4
b	関心がなかった	3	21.4
c	その他	2	14.3
	回答者数	14	100.0
	1でa, b, c, dと回答または、未回答	33	—
	総回答者数	47	—

3 これからのNPOインターンシッププログラムについて

(1) 学生を対象としたNPOインターンシップをについてどのように考えるか(単数回答)

対象者：全員

学生を対象としたNPOインターンシップについて、「可能な一部のNPOは受け入れるとよい(32人 68.1%)」が最多で、「多くのNPOで展開していくとよい(14人 29.8%)」が続く。

1	学生を対象としたNPOインターンシップをについてどのように考えるか SA	人数	%
a	多くのNPOで展開していくとよい	14	29.8
b	可能な一部のNPOは受け入れるとよい	32	68.1
c	あまり積極的に展開する必要を感じない	1	2.1
	総回答者数	47	100.0

(2) どのようなプログラムが望ましいか(単数回答)

対象者：学生を対象としたNPOインターンシップを展開していくとよいと回答した人

どのようなプログラムが望ましいかという質問に対して、「セクターや社会課題の実態を学生が体験する(24人 52.2%)」が最多で、「一定の期間・責任ある仕事を体験するプログラム(14人 30.4%)」が続く。

2	どのようなプログラムが望ましいか SA	人数	%
a	セクターや社会課題の実態を学生が体験する	24	52.2
b	一定の期間・責任ある仕事を体験するプログラム	14	30.4
c	インターン先への就職につながるプログラム	0	0.0
d	ネットワークが生まれるプログラム	6	13.0
e	その他	1	2.2
	未回答者	1	2.2

	回答者数	46	100.0
	1でcと回答または、未回答	1	—
	総回答者数	47	—

(3) NPO インターンシップに参加を検討する上で重要な条件 (複数回答)

対象者：学生を対象としたNPOインターンシップを展開していくとよいと回答した人

NPO インターンシップに参加を検討する上で重要な条件として、「団体側での受け入れ体制や設備(28人 60.9%)」が最多で、「団体と学生の間に入るコーディネート機能(23人 50.0%)」、「学生側の社会人常識や団体情報などの事前勉強(17人 37.0%)」が続く。

3	NPO インターンシップに参加を検討する上で重要な条件は何だと思うか MA	人数	%
a	団体側での受け入れ体制の整備	28	60.9
b	学生側の社会人常識や団体情報などの事前勉強	17	37.0
c	団体と学生の間に入るコーディネート機能	23	50.0
d	あまり条件を考える必要はない	0	0.0
e	その他	2	4.3
	回答者数	46	100.0
	1でcと回答または、未回答	1	—
	総回答者数	47	—

(4) ソーシャルセクターで働き始めたきっかけや原体験 (自由記入)

対象者：全員

回答者がソーシャルセクターで働くきっかけや原体験は、以下のとおりである。

- 母がフードバンク団体を立ち上げたため、それを手伝う形でフードバンク活動に従事することになった。
- 偶然ハローワークで見かけたから。入職してからソーシャルセクターの事は学び、体験した。
- 自分が災害当事者となり、中間支援組織の役割について学びたいと思ったから。
- 書籍を通じてNPOで働いている人の存在を知り、自分もNPOで働きたいと思い、インターネットで検索して見つかったNPO法人(現在の職場)へ問い合わせをしたことがきっかけでした。当初はボランティアで関わらせていただくつもりでしたが、ちょうどアルバイトの枠が空いており、アルバイトを経て現在に至っています。
- 学生時代からボランティア活動などを通じてソーシャルセクターの方々に関わる機会があり身近に感じていた。大学卒業後は建設会社に勤め施工管理をしていたが転職を考えたとき、現在の法人で働いていた方から紹介された。
- 自分自身が仕事以外で学生時代から活動を続けているからです。NPOだとか、ボランティアだとかの意識は当時からほぼありません。課題があると思うからやっています。その学生時代からの動きがきっかけとなり、アルバイトスタッフになり、修了と同時に就職することになりました。
- 地域貢献活動の延長線として
- ボランティアとして参加したプログラムが良かったので、そのままその団体でインターンを始めたのがきっかけです。
- 学生時代の被災地支援活動で、地域に入って地域の人共に復旧・復興に向かっていくことの楽しさ・難しさを経験したため。
- 身近にNPOの活動をしている友人がいたこと。その友人がイキイキと活動をしていたため、NPO業界に興味をもったのがきっかけでした。

- 学生時代の様々な体験からか、「社会の役に立ちたい」志向が強かったため。
- ボランティアという文脈では、小学生時代に老人ホームでのお手伝い、前職で小学生への講義補佐や高校生向けのジョブシャドウを経験。学生時代から社会課題に関心があったものの、ソーシャルセクターの情報が身近になく、まわりからきっかけが与えられたわけではないです。
- NPO、JANPIA とともに転職サイトがきっかけだが、金融機関に勤務し数字ばかりの仕事ではなく、社会に貢献したいと感じたことがきっかけ。
- NPO 等ソーシャルセクターそのものでのインターン経験はなかったものの、新聞社でインターンをしていた際に多くのソーシャルセクターの現場取材をさせていただいた。
- 社会的有用な事業に参加したかった。
 - ・学生 NPO 在職時にインドでの NGO 経験 自分では何も世界は変えられないちょっとした絶望経験
 - →ビジネスで経験を積み、今だったら何か役に立てるかもしれない
 - ・学生 NPO 在職時に圧倒的に優秀な仲間との出会い
 - →その仲間が今も社会課題に向き合っている仲間感、彼らへのあこがれ”
- もともと社会課題や社会福祉に関心が高かったが、中間支援団体に所属したことでネットワークが広がり、ソーシャルセクターの方がより自分らしい働き方ができると気づいたから。
- 20 年近く勤めていたメーカーをリストラされたのちいくつかの職を転々としていたが、その中で一番向いているなどと思ったのが産業振興の公財での助成金業務だった。そういう業種での募集はないかハローワークで相談したところ、コミュニティ財団の事務募集を紹介されて就職したのがきっかけです。それまで、いわゆる社会課題への関心も薄くソーシャルセクターと言われるところに全く縁がなかったのも、あらゆるものが新鮮で驚きと戸惑いを感じつつもやりがいのある仕事だなと感じています。
- それまでは会社とその周辺の様子しか知らなかったために、いざその職を失ったときの心の拠り所がなく、知らないでいたことを後悔しました。もっと積極的に社会とかかわっておけばよかったと、非常に後悔しました。
- これから社会に出る学生さんには、職業として知ってもらったり体験してもらおうのもいいと思いますが、それ以上に「家庭や会社（職場）以外のつながりは持っているほうがいいし、そういう場もあるんだよ」ということを知るきっかけにしてもらいたいと思います。
- そのため、卒業したあとの社会人になっても活かせる（思い出せる）ネットワークづくりの基礎になるような、そんな体験をして欲しいなと感じています。
- 民間公益活動に休眠預金を活用する仕組みができたことから、制度を担う団体をつくる必要があったため。
- 生死にかかわる病気をして、世の中に何を残すことができるのかを考え、ボランティアをはじめた。
- そのボランティア活動を通じて、面白い、楽しい大人たちに沢山出会えたのが良かった。
- 新卒で一般企業に入社したが、身を粉にして誰の、何のために働くのかを考えた時に、もっと直接的に社会を良くすることを仕事にしたいと思ったから。
- もともと市の委託事業である、まちづくり学校の『地域づくりチャレンジ塾』に塾生として参加し、そこで、現在所属している NPO の代表と出会った。
- 昨年、会社を退職したことをきっかけに、声をかけてもらった。
- ウィズ広島でのカフェにボランティア保護司として参加していた。
- 中学校の修学旅行で UNHCR を見学したことや、高校時代に東日本大震災を経験したことで、人の役に立つことをしたいと強く感じるようになりました。また、新卒で企業に就職しましたが、利益のみを追求する姿勢に疑問を感じ、より真摯に社会課題の解決に取り組む人たちと働きたいと改めて感じ、転職しました。
- 社会人大学院の授業で自分のライフラインチャートを描く機会があり、学生時代に環境問題や貧困などの社会課題に関心があってボランティアをしていたことを思い出したのがきっかけです。そこからプロボノ参加、ソーシャルセクターへの転職につながりました。
- 社会人 1 年目に社会の厳しさから離職しました。その後、NPO 的な団体で障がいのある子ども達の放課後をサポートする職に従事する中、その子ども達が社会に巣立っていく際、現状の自分では役に立たないと考えました。そのことをきっかけに、一般的な求職活動で就職することが困難な状態にある方を対象とした就労支援会社に就職しました。個人支援に 20 年取り組み、現在は 3 年間限定で休眠預金活用助成事業において個人ではない団体支援に取り組んでいます。個人であっても団体

であっても支援プログラムを作成し未来に向かうことに変わりはないと感じています。

- 身近に障害者がいたことから社会的包摂について関心を持つようになったから
- もともと少年の矯正教育をしていたが、制度の範囲内でしか対応ができず、帰宅後のサポート体制を拡充しなかったから。司法×福祉の知識を得たかったから。
- 小さいころから社会の疑問をずっと持ち続けていて生きづらさを無意識的に感じていた。親からつけられた名前の漢字が読みにくいいため、小学校時代からずっと初対面の先生から一度も正確に名前を呼ばれなかったこと。「大人なのになぜ読めないのだろう?」。高校時代に英語・数学・化学が好きだったが、行きたい大学の学部は国語・日本史・英語の入試であった。「なぜ数学・化学で勝負できないのだろう?」。最初に就職した企業の支社長は年間の 1/3 がゴルフ接待だと聞く。「仕事っていったい何だろう?」。
- 人生一度きりであるならば、「収入のために仕事をすると割り切って、余暇を充実させる」のか「1 日の 1/3 が仕事に充てられるのであれば、好きなことを仕事にしよう」とするのか。後者を選び、今に至る。
- 以降、芸術（映画と舞台芸術）による仕事を続けている。ソーシャルセクターは人形劇を通じた居場所づくり。
- 振り返れば、小学校時代に養護学校と交流したこと、都会に住む多動の子の田舎留学の受入れ時に、先生からの指示で班長である私のところに来て一緒に過ごしたという経験。院生時代に居場所づくりに関わったことに通じている。
- 個人的な印象として、中学までの経験を螺旋階段のように上がっているイメージを持っている。新たな挑戦をしているというよりは、そこまでに培ったものを下敷きにさまざまな形で発展させている。
- 学生時代のボランティア経験と NGO で働いていたゼミ OG の体験談を聞いた経験および、卒業直後に長期間インターンをした経験から。

4 団体ヒアリング概要

1、ヒアリングの目的

行われているインターンシップの実態、インターンシップや若者育成に関する考え方、資金分配団体と実行団体の役割分担などをお聞きすることを通して、JANPIAがソーシャルセクターにおける若者の担い手育成を目指すとしたインターンシップを検討するために必要な情報を得ることを目的とした。

2、ヒアリング実施者

芥田真理子さん、加藤剛さん、山下裕子さん（JANPIA）
高城芳之、奥田裕之（アクションポート横浜）

3、ヒアリング対象団体

(1) 認定 NPO 法人 フードバンク信州

日時； 2月28日 対象者； 美谷島越子さん（フードバンク信州副理事長兼事務局長）
途中参加； 高橋潤さん（長野県みらい基金/資金分配団体）
属性； 実行団体

(2) 公益財団法人 長野県みらい基金

日時； 3月2日 対象者； 高橋潤さん（長野県みらい基金理事長）
属性； 資金分配団体

(3) NPO 法人 寺子屋方丈舎 /ふくしまこども食堂ネットワーク

日時； 3月2日 対象者； 江川和弥さん（寺子屋方丈舎理事長、ふくしまこども食堂ネットワーク代表）
属性； 実行団体

(4) 一般社団法人 全国食支援活動協力会

日時； 3月3日 対象者； 平野覚治さん（全国食支援活動協力会専務理事、ふきのとうの会理事長）
大池 絵梨香さん（全国食支援活動協力会）
属性； 資金分配団体

4、ヒアリング団体の選定方法

アンケートに回答いただいた団体を主とし、資金分配団体2団体、実行団体2団体へヒアリングを行うこととした。一つは、「フードバンク」というテーマの中での資金分配団体である「全国食支援活動協力」、その実行団体である「寺子屋方丈舎（ふくしまこども食堂ネットワーク）」の組み合わせとした。もう一つは、地域社会の中における資金分配団体と実行団体とし、資金分配団体は「長野県みらい基金」、実行団体である「フードバンク信州」の組み合わせとした。

(1) 認定 NPO 法人 フードバンク信州

【ヒアリング日時、対象者】

日時； 2月28日
対象者； 美谷島越子さん（副理事長兼事務局長）
途中参加； 高橋潤さん（長野県みらい基金/資金分配団体）

【基礎情報】

設立； 2016年、所在地； 長野県、活動地域； 長野県全域
属性； 実行団体（資金分配団体； 公益財団法人長野県みらい基金）
助成事業； 食の循環システム構築事業 「経済的困窮を食の循環で支援するためのプラットフォーム」

【アンケート回答内容】

- ①NPO インターンシップの受け入れ経験 /ボランティアのみ
- ②理由/インターンの受け入れ体制が整っていない、余力がない
- ③今後/体制が整えば受け入れたい
- ④その場合の狙い /ステークホルダーの拡充
- ⑤その場合の要件 /スタッフの負担小、金銭的負担なし、一定の専門性に期待
- ⑥ JANPIA のインターンシップ・プログラムに /関心あり

【ヒアリング概要】

日常的な活動内容

事業として、1. 寄贈食糧の受け入れと食料の提供、2. 食の循環システムの構築、3. 地域での拠点強化とネットワークの活性化を行っている。具体的には、企業や地域との連携を構築して食料品の寄付を促すとともに、寄付を受けた食料品を箱詰めして郵送で該当者に送る活動、県内各地域でフードドライブ（食品を持ち寄り寄る拠点）の開催を支援、普及する活動など。地域に具体的な現場を持たず、企業や個人、地方自治体をつなぐ中間支援組織としての特徴を持っている。休眠預金の事業では、県内の10広域に、地域ネットワークシステムをつくっていくことに加え、支援者と企業向けのクラウドシステムを構築している。

ボランティア活動の受け入れ状況など

当団体が毎月定期的実施している「子ども応援プロジェクト」では、高校生、大学生、のほか登録ボランティアが継続して定期的にボランティアが来てくれる。その人数は毎月7、8名。学生は休日や夏休みが中心となっている。その他にも、定年後の方、県立長野大学のアメリカ人講師なども来てくれる。そこでは、箱詰めなどの作業を中心としながら、一緒にいろいろなことを考えながら進めることが出来ている。高校生や中学生が課題研究で研修に来る方が何人かいたが、学校の担当教諭の問題意識による力の違いが大きいと感じる。

ボランティアは登録制にしている、現在の登録者は約30名。土日にボランティアを受け入れることは、スタッフの休みと重なるために難しい。

計画的なインターンは受け入れていないが、大学生の短期アルバイトは受け入れた経験がある。学生ボランティアの活動を見ていると、ケースによってはインターン的なアルバイトも今後の活動には必要と考えている。

JANPIA によるインターンシップ支援について

外部からの支援があればインターンシップは受け入れたい。そこではコアなスタッフになってくれる学生、若者のマネジメントの体験などが考えられる。学生の多くは社会の実際を理解しないで参加してくるが、現実の社会はもっと広いという理解を深めることもできるだろう。就職後に、別の仕事をしながら、このテーマや活動に関心を持ち続けてくれれば良いと思う。

問題は、その際に当団体側に受入のゆとりが持てるかという部分。当団体は現在のところフルタイム職員が少なく、インターンシップに対応するコーディネーターと、その人件費の確保が難しい状況。

資金分配団体と実行団体の関係性について

当団体も中間支援的な機能を持っているため、同様の性質を持つ資金分配団体（長野県みらい基金）との間で、インターンシップを実施していく上での関係性については、否定するものではない。

今後の課題ほか

活動を安定的に進めていくために、県内の企業を巻き込むことが必要となっている。また、フードバンク活動に対する企業への理解を深め、寄付金の増額も期待したい。

長野県フードバンク活動団体連絡会が、長野県、長野県社会福祉協議会、市町村社会福祉協議会、長野県労働者福祉協議会、信濃福祉、長野市社会事業協会、フードバンク信州、NPO ホットライン信州等の関係団体が参加して立ち上がっている。この動きも重要になっていくと考えている。

【意見交換】

・広報やファンドレイズのインターンを受け入れている団体もある。その際に、地域の企業は若者が活動に協力していることを喜ぶ傾向があるので、そのようなことを検討することも良いかもしれない。

(高橋氏)

・インターンシップを広く受け入れるためには、何らかの工夫が必要だろう。個人情報の扱い、インターンシップの手法の整理、指針・ガイドブックなどが必要なのではないだろうか。(高橋氏)

(2) 公益財団法人 長野県みらい基金

【ヒアリング日時、対象者】

日時； 3月2日

対象者； 高橋潤さん(理事長)

【基礎情報】

設立； 2016年、 所在地； 長野県、 活動地域； 長野県全域

属性； 資金分配団体

助成事業； 地域支援と地域資源連携事業「困難を有するこども若者その家庭の課題を地域ぐるみで解決する」

【アンケート回答内容】

①NPO インターンシップの受け入れ経験 /あり、大学生、5～10日間、
実施内容（支援策訪問同行 会議開催補助）

②課題 /就職との継続

③今後 /体制が整えば受け入れたい

④その場合の狙い /将来の雇用

⑤その場合の要件 /団体の金銭的負担がないこと

⑥ JANPIA のインターンシップ・プログラムに /関心あり

【ヒアリング概要】

設立の経緯

2012年に長野県が形成したクラウドファンディング運用のための団体として、県内の中間支援組織が集まって設立。当初はNPO法人だったが、2018年に公益財団法人に衣替えを行った。その際に、利益相反を避けるために中間支援組織は運営メンバーから外れ、協力団体となっている。財団の運営メンバーはオール長野を意識し、労働団体を含む全県連携で組成した。

団体概要

長野県からの資金は受けていないが、本部事務所が県庁の中にあり、人材の派遣などの支援を受けている。長野市（本部）では常勤4名、松本市（事業部）では常勤2名と非常勤3名などとなっている。スタッフはシニアを中心としているが、2年ごとに県から主事クラスの出向職員を1名受け入れている。

コミュニティ財団として寄付を集めるため、個人寄付や寄贈寄付に加えて、全国の財団等との連携、地元企業からの寄付の受け入れなどを行っている。また、地域の資金循環に加えて、基盤強化的な支援として相談事業や専門家紹介も行っている。

資金分配団体としての休眠預金の活用について

長野県内での寄付を受け入れる「長野県みらいベース」という仕組みがある。そこは長野県がウェブサイト構築、当団体が運用を行い、県内の342団体が登録している。「長野県みらいベース」はNPOを育てるという趣旨を持ち、任意団体も多い。休眠預金の資金提供は、ある程度しっかりした事業を対象としているため、該当しない団体も多い。それに対しては年間の事業規模が100万円であっても、良い事業であれば休眠預金外で支援をしている。休眠預金は、そこで育った人たちのステップアップ

プに活用できている。休眠預金との組み合わせがあることで、各団体に自身の力量を上げようというインセンティブが働いている。ただし、そこに人材育成の資金がないことは問題だと思っている。

インターンの受け入れ状況など

県外の大学に行っている意欲のある学生さんが、リターンで地域に就職を希望し、当団体に関心を持って休暇期間ごとにインターンを行っていた。本人の意欲も高かったのだが、就職の時期になった時に当団体から支払える給料が他のスタッフとの兼ね合いもあって十分に用意できなかったことが大きな理由となり、残念ながら就職いただくことができなかった。

団体として個人情報を扱うことも多いため、短期のインターンやアルバイトを受け入れることには躊躇している。

資金分配団体として行う、インターン調整について

「長野県みらいベース」に関係している団体の動きは把握しているので、そこでインターンをつなぐことは可能。休眠預金の関係で3年間つきあうことで、団体の内実がより深くみえていくということもある。

現在も、JANPIAの紹介でプロボノを紹介している。そこで第三者的な団体が間に入らないとスムーズにいかないことが分かった。そのため、ある程度動き出すまでは一緒に伴走している。地域のNPOにつながるためには、間をつなぐ仕組みが必要であり、何かがあったら相談してもらいたい立場が必要だと考えている。

インターンプログラムについて

インターンプログラムを受け入れる場合は、そこに付随する業務と時間が取られるので、そのボリュームをどう内部化できるかが課題だと思う。当団体が休眠預金を卒業した後はその費用がなく、団体の費用として出すことは厳しいだろう。JANPIAによる、基盤強化助成の一環なら嬉しい。

時折、長野県から依頼が来るインターンシップは体験止まりであるため、新たに行うのなら長期インターンがいいのではないかとと思われる。ただ長野県も広いので、学生がインターン先に行く交通費、昼食など、資金的な支援体制をどう整えるかがポイントにもなる。出口として、インターンによる新規雇用につながれば良い。

【意見交換】

- ・ 現在は大学とのかかわりは薄く、学生本人やゼミ単位でのかかわりとなっている。
- ・ 学生が参加する場所（団体）は元気になっているように見える。
- ・ SNSについて苦手な団体が多いので、そこに対する若者参加があれば助かるだろう。
- ・ 若者の多くはインターン先までの交通機関が必要なので、交通費の負担は必要。現在は、適宜クーポンカードでの支払いなどを行っている。

(3) NPO 法人寺子屋方丈舎 /ふくしまこども食堂ネットワーク

【ヒアリング日時、対象者】

日時； 3月2日

対象者； 江川和弥さん(寺子屋方丈舎 理事長、ふくしまこども食堂ネットワーク代表)

【基礎情報】

設立； 2017年、 所在地； 福島県、 活動地域； 福島県全域

属性； 実行団体（資金分配団体；全国食支援活動協力会）

助成事業； ふくしまこども食堂組織基盤整備「こども食堂ネットワークを整備し、持続的展開を拡充させる事業」

【アンケート回答内容】

- ①NPO インターンシップの受け入れ経験 /あり、大学生・社会人、11日～1ヵ月
実施内容（広報支援、現場でのインターンシップ）

- ②課題 /責任範囲と契約がなかなか守られない時の対応
- ③今後 /積極的に受け入れたい
- ④その場合の狙い /将来の雇用
- ⑤その場合の要件 /期間が長いこと
- ⑥ JANPIA のインターンシップ・プログラムに /関心あり

【ヒアリング概要】

活動概要

子ども食堂を行っている団体のネットワークとして「ふくしま子ども食堂ネットワーク」を2017年に設立、現在は75団体の参加があり、毎年増加している。事務局はNPO法人寺子屋方丈舎が担っている。設立の目的は、震災後の福島における地域コミュニティの再生であり、その手段として地域食堂的なアプローチを進めていくこと。

福島県内には、現在110ほどの子ども食堂があり、可能率は75%ほどとなっている。加入には条件があり、メンバーシップの理解のために無料参加ではなく参加費をいただいている。参加メリットは、食中毒などの際の保険、助成金情報、ノウハウの提供など。

休眠預金による活動

休眠預金の資金を活用して、テンプレートの作成などを行い、持続可能な子ども食堂のモデル提供を行っている。具体的にはABCDパターンのひな型を整理し、一番簡易なAパターン（年間50万円規模）の提案を行っている。そのための非資金的な支援も大事にしている。

子ども食堂では、地域のステークホルダーから食材を回収すること、ボランティアを探すこと、寄付などを、地域ごとに成立させることが重要だと考えている。例えば、子どもたちにも出来る事として、農家の収穫手伝い、一人暮らし老人のゴミ出し手伝いを促すなど、各コミュニティごとの課題解決の循環を目指している。参加のデザイン、仕組みづくりを大切にしている。

資金分配団体との役割分担について

資金分配団体は東京にある「全国食支援活動協力会」となっている。同じ分野で活動する「全国食支援活動協力会」は、全国や大企業などからの食料品の受け皿と分配システムを受け持っている。大きな規模でのロジとハブを担っていて、県域での物流には関与していない。福島県内の実行団体や地域社会では、それぞれの目的と事業を行う理由をしっかりと持っていることが重要だと考えている。

インターンの受け入れ状況など

寺子屋方丈舎としては、これまでNPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）やNPO法人ドットジェイピーなど、学生とかかわりのある団体からインターンやボランティアを受け入れた。休み期間に、長期にわたる受け入れを行うことによって、期間終了後にも関係性ができるメリットがある。今後は企業インターンシップを入れたいと考えている。オンラインを活用し、福島出身者で東京などで働いている人を受け入れ、地域社会を東京から応援するイメージ。

子ども食堂の多くでマンパワーが足りないという課題がある。学生が多い地域では支援者が集まりやすいが、学校から離れていると集まりにくい。福島出身の学生が休み期間にインターンに来るなど、学生だからこそ地域にコミットすることは重要と考えている。大学のボランティアセンターとの関係性はあまりない。その理由は当団体側にそのためのコストと余裕がないため。

インターンプログラムについて

準備やコストの問題があるため、インターンは長くないと受け入れが難しい。最低2週間はお願いしたい。インターンシップの理解を通して、その外部にも理解をうながしていく良い影響もあるだろうと考えている。

多くの学生はお金を持っていないこと、インターンに受入団体側にもコストがかかっていることなどから、受益者負担でインターンシップを進めることは難しい。教育的なシステムに対して費用を出す仕組みが必要だと考えている。

【意見交換】

- ・ 地方での少子化の流れは大きく、そこに対処することが地域で求められている。東京に行った学生が地方に戻っていくこと、地域にお金を戻していくことなどがとても重要。
- ・ インターンシップを受け入れる側の団体でも、インターンシップは学生にとってどういう意味があるのかなど、顧客視点を持つことが重要である。その上で、インターンシップを実施するために必要なシステム、教育的視点、実施のノウハウが必要だと思われる。

(4)一般社団法人 全国食支援活動協力会

【ヒアリング日時、対象者】

日時； 3月3日、 対象者； 平野覚治さん(全国食支援活動協力会専務理事、ふきのとうの会理事長)
大池 絵梨香さん(全国食支援活動協力会)

【基礎情報】

設立； 1986年(全国老人給食連絡協議会)、所在地； 東京都、活動地域； 全国(拠点37)

属性； 資金分配団体

助成事業； こども食堂サポート機能設置事業

【アンケート回答内容】

- ①NPO インターンシップの受け入れ経験 /あり、大学生・大学院生、5日未満
実施内容(会議への同行・参加、イベント運営手伝い、活動団体先での活動など)
- ②課題 /大学の意向と当会で期待することとのマッチングが上手くいかないことがあった
- ③今後 /体制を整えば受け入れたい
- ④その場合の狙い /人材育成力の強化(組織力強化)
- ⑤その場合の要件 /団体の金銭的負担がないこと、学生のレベル、期間が長いこと
- ⑥ JANPIA のインターンシップ・プログラムに /関心あり

【ヒアリング概要】

設立の経緯

世田谷区の「プレーパーク冒険遊び場」の空き地を残す活動で、母親たちと高齢者(障がい者)の動きが結び付き、1983年に「老人給食協会ふきのとう」を設立。その後、オーストラリアの老人給食の活動に学び、複数の団体の連携会として「全国老人食連絡会」を1986年に設立、「ふきのとう」が事務局を担っていた。それぞれ、1996年に「社会福祉法人ふきのとうの会」、2013年に「一般社団法人全国食支援活動協力会」となっている。

現在「社会福祉法人ふきのとうの会」では、通所介護事業、サービス付き高齢者向け住宅、地域包括支援センター運営、配食サービスなどを行っている。

団体概要

全国食支援活動協力会は、食を通じた地域づくり連絡組織として高齢者支援からスタートし、現在は若者、子ども支援まで展開している。事業は、調査研究事業、食でつながるフェスタの開催、地域の老人・子ども食堂のバックアップ、食の物流ネットワークづくりなどを行っている。その中で、全国にモデルを提供するとともに、民間企業からいただいた食料寄付を、全国37カ所の分配拠点に調整、差配している。

資金分配団体としては、「全国各地に設置するこども食堂サポートセンターに対してこども食堂間のネットワーク形成ノウハウの提供、食に向き合う体験プログラム実施や安全な作業環境整備の伴走支援、地域資源の開発支援などを行い、子どもの健全育成を達成する」事業を行っている。

インターンの受け入れ状況など

「ふきのとうの会」では、ボランティア・インターンともに受け入れている。高校生も多く、大学生からは自分の関心領域を持った上での問い合わせも多い。主に老人給食を対象とした活動なので、マンツーマンにはなりにくいという利点がある。人間科学総合大学、在宅の管理栄養士などの専門性を持つ

たインターンも受け入れた。例えば、皿洗いという仕事は、知的障害、発達障害の子などにも適している。広い年代者とのかかわりを含む、そのようなインクルーシブな多様性を体験することも重要だと考えている。

学生ボランティア、インターンシップの経験を持った人がNPOで働いているケースもある。「全国食支援活動協力会」のような直接的な現場を持たない団体でも、その事務局を担うということで内部を知り、さまざまな人脈がつながっていく機会にもなるだろう。

自分の団体で考えると、例えば「かばん持ち」のインターンシップをお願いして、そこからいろいろなものを吸収し、次につなげて欲しい。若い方が、新たに何かを組み立てる力の育成が出来ればとても良い。

インターンプログラムについて

「全国食支援活動協力会」はプロジェクト的な動きを行っている。インターンシップ・プログラムに協力するとしたら、現場につなげていくことが中心になるだろう。その中で優先度と、方程式の作成が重要だと思われる。

例えばサポート大坂で行っている、釜ヶ崎支援機構、企業、学生などに対してコア拠点の紹介などはできる。民間企業のボランティアの紹介というケースはすでに存在している。個人、大学、地域などで、ボランティアやインターンシップをやみくもに行うのも大変だろうと思う。

【意見交換】

- ・ 当団体がインターンシップを組織的に行うとしたら、それを行う上でのモデル、実行のための資金を持つことが必要となる。
- ・ また、大学にアクションを仕掛けるルートが少ないため、インターンシップを行うことによってそのルートができると助かる。
- ・ いまの学生の多くでお金がないことへの留意は必要。交通費などの必要な経費を外部から補填することは重要
- ・ 多くの福祉系NPOで、これまで活動を推進してきた人たちが高齢化する一方、これまでの事業に新しい要素を加えにくくなっている。これからは、古い福祉団体の持っているストックを若い世代が継承する工夫が重要ではないかと考えている。